

綿森淑子 監修・土本亜理子 著

純粹失読 書けるのに読めない

江藤文夫（東京大学医学部附属病院リハビリテーション部）

ある日突然、字が読めなくなる。目は見えているのに、書くことはできるのに、いま自分で書いたばかりの字が読めない。本書は、こうした特殊な文字言語の障害である純粹失読を生じた人々の困惑と回復への努力を精力的な取材活動によりまとめた現場報告と純粹失読に関する解説書である。

第1章では広島のO氏とその婦人による闘病記録に基づき、脳卒中の医療現場の様子と純粹失読の障害像が描かれ、この本の企画者でもある広島県立大学の綿森淑子氏によるO氏の言語に関するリハビリテーションの経過が解説されている。第2章では、O氏の障害の中核をなす純粹失読について東京女子医科大学の岩田誠氏と英国MRCのカラリン・パターンソン氏の解説が加えられている。ついで第3章では同様の障害を体験したA氏、T氏、K氏からのメッセージが紹介され、第4章で30年前に発症し社会復帰を果たしたU氏とその夫人と治療を担当した国際医療福祉大学の笹沼澄子氏による座談会の様子が紹介されている。最後に第5章では、純粹失読を含めた高次脳機能障害に対する取り組みの現状と問題が解説されている。

A氏が入院した大学病院の受け持ち医が「ここにはないですよ」と言ったりリハビリテーションは、病院の受付で聞いたら「ありますよ」と答えられ、行ってみたら言語訓練室もいくつかあったというエピソードはリハビリテーション医療の現状を伝えるものとして興味深い。数多いリハビリテーションの体験記の中で横田整三氏による「脳卒中リハビリ日記」（朝日選書、1985年）には本書で登場する吉野真理子氏も登場する。医学におけるリハビリテーションの位置づけに関する事情は当時とあまり変わらないのかもしれない。

笹沼氏の言葉に、「当然のことながら純粹失読の方々の中での個人差も、大変に大きいわけです」とある。純粹という言葉の意味からして検証を要する領域である。EBMが強調され、メタアナリシスが脚光を浴びているが、集団を均質な群として層別化できるほど人体、あるいは精神機能について明確にされているのであろうか。臨床医学では、今日でもナレーションの技術を大切にすべきである。本書には優れたナレーションがある。

（四六 頁240 1,800円＋税 2002 三輪書店刊）